

平成20年7月18日
水産庁
独立行政法人 水産総合研究センター

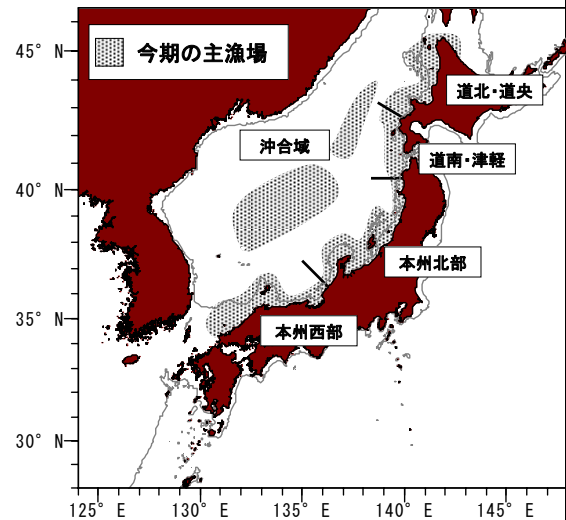
平成20年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報

—別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果—

今後の見通し（2008年8月～12月）のポイント

対象魚種：スルメイカ
対象海域：日本海
対象漁業：主にいか釣り漁業
対象魚群：主に秋季発生系群

- (1) 来遊量：
昨年および近年平均より多い。
- (2) 漁期・漁場：
沖合域を中心に11月まで良好。
- (3) 魚体の大きさ：
前半は小さい。



※「近年平均」は最近5年間（2003年～2007年）の平均を示す。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：大隈、和田、染川

電話：03-3502-8111(内線 6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先 URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人 水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先 URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>

平成 20 年度第 2 回日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2008 年 8 月～12 月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り漁業（中型いか釣り、小型いか釣り）

対象魚群：主に秋季発生系群

1. 道北・道央（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年を上回り近年平均並み。
- (2) 漁期・漁場：概ね対象期間を通じて形成。
- (3) 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年および近年平均を上回る。
- (2) 漁期・漁場：12 月は昨年を下回る。
- (3) 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年および近年平均を上回る。
- (2) 漁期・漁場：昨年よりも持続する。
- (3) 魚体の大きさ：近年平均より小さい。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年および近年平均を上回る。
- (2) 漁期・漁場：11 月頃が中心。
- (3) 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

5. 沖合域（中型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年および近年平均を上回る。
- (2) 漁期・漁場：主に大和堆周辺海域。
- (3) 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。



* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（日本海中央部）

** 近年平均は最近5年間（2003年～2007年）の平均を示す。

I 予報の説明

2008年6月までの漁況の経過、6月下旬から7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、および冬季発生系群を主体とした太平洋での分布状況（平成20年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報）を主要な情報として今期の各海域における漁況を以下の通りに予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

道北・道央海域では通常、7月～8月と10月～11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は冬季発生系群が主な漁獲対象となる。漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊量は昨年を上回り、近年平均並みであった。しかし、魚体が小型であったため、6月の漁獲量は昨年および近年平均を下回った。

今期の漁況は、昨年を上回り、概ね近年平均並みと予想される。魚体の大きさは、前半は近年平均より小さい見込み。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

道南・津軽海域では例年7月が漁期のピークであり、10月～11月にもう一つ小さなピークが出来る年もある。漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊量は昨年および近年平均を上回った。しかし、魚体が小型であったため、6月の漁獲量は昨年および近年平均を下回った。

今期の漁況は、昨年および近年平均を上回るが、太平洋からの来遊群によって昨年好調であった12月は、昨年を下回ると予想される。魚体の大きさは、前半は近年平均より小さい見込み。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

本州北部日本海域では漁期の中心は5月～7月であり、8月以降にこの海域での活発な漁場形成は通常見られない。5月の漁獲量は、魚群の北上が遅れたことに加えて魚体が小型であったため、昨年および近年平均を下回ったが、6月は昨年を上回った。漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊量は昨年および近年平均を上回った。

今期の漁況は、本海域への来遊量が多く、魚群の北上も遅いことから、昨年よりも漁期が持続すると予想される。魚体の大きさは近年平均より小さい見込み。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

予報対象期間の西部日本海では、10月以降に主に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。5月の漁獲量は昨年並みであったが、6月は昨年および近年平均を下回った。漁場一斉調査結果では、今年の当海域および沖合域の来遊量は昨年および近年平均を上回ったが魚体は小さかった。

今期の漁況は、10月以降に沖合から魚群が南下し、11月頃を中心に近年および昨年を上回ると予想される。魚体の大きさは、前半は近年平均より小さい見込み。

5. 沖合域（中型いか釣り）

沖合域では主に大和堆付近が漁場となり、8月～9月には武蔵堆付近も漁場となる。漁場一斉調査結果では、沖合域の来遊量が多かったが、大型の個体の割合は少なかった。

今期の漁況は、11月まで昨年および近年平均を上回ると予想される。魚体の大きさは、前半は近年平均より小さい見込み。

II 予報に用いた主要な情報および調査結果

1. 漁場一斉調査結果

1) 分布状況

2008年の日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の分布状況を、日本海漁場一斉調査（6月下旬～7月上旬に実施）によって調べた。調査結果の概要は下記の通りであった（図1）。

- (1) 道北～道央海域では、CPUE（釣機1台1時間あたりの採集個体数）が20個体以上の比較的分布密度の高い調査点があった。外套背長17cm未満の小型の個体が中心であった。
- (2) 道南・津軽海域では、外套背長17cm未満の小型の個体が中心であったが、分布密度が高く、CPUE（釣機1台1時間あたりの採集個体数）が50個体を超える調査点（84個体）もあった。
- (3) 本州北部日本海のCPUEは20個体前後の調査点が多く、比較的分布密度は高かった。能登半島付近では、外套背長19～21cmの個体の比率が高かった。
- (4) 西部日本海の沿岸域ではCPUEが20個体未満の調査点が多く、分布密度は高くなかった。隠岐諸島付近では外套背長17cm未満の個体の比率が高かった。
- (5) 沖合域ではCPUEが50個体以上の調査点が大和堆付近で複数見られ、分布密度が高かった。しかし、外套背長21cm～23cmの大型個体の比率は少なく、23cm以上の個体は殆ど見られなかった。

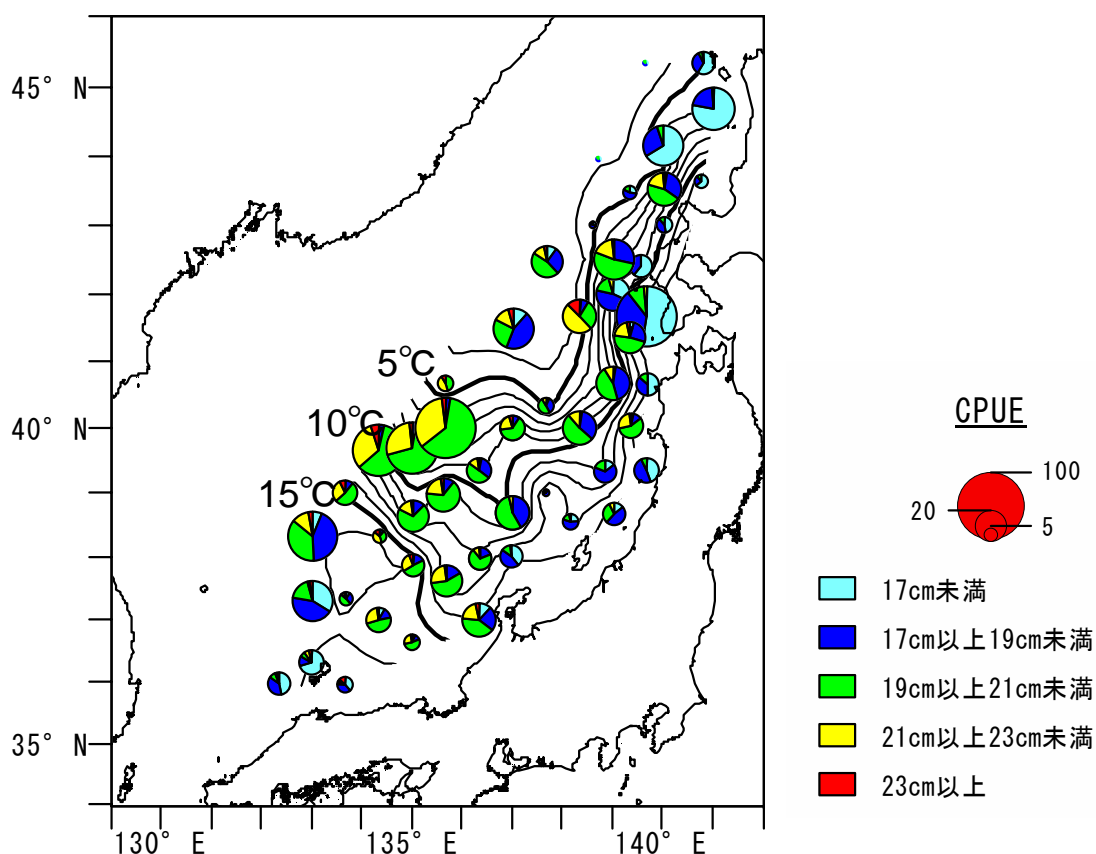


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況

○の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集個体数）を示し、○中の配色は各外套背長範囲の比率を示す。水深50mの水温分布も示した。

2) 資源水準

釣獲試験を行った全調査点の平均 CPUE（釣機 1 台 1 時間あたりの採集個体数）を日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数とした。資源量指数の過去 30 年間の変化傾向として、1970 年台と 1980 年代は減少傾向・中～低水準であったが、1990 年代は増加傾向となり、中～高水準になった（図 2）。2000 年前後は高水準を維持していたが、2003 年～2007 年まで減少傾向にあった。

2008 年の資源量指数は 21.06 個体であり、昨年(11.18 個体)の 188%、近年平均(14.43 個体)の 146%であった。したがって、今年の日本海におけるスルメイカの資源量は昨年および近年平均を上回り、2000 年前後と同様の高水準にあると判断される。

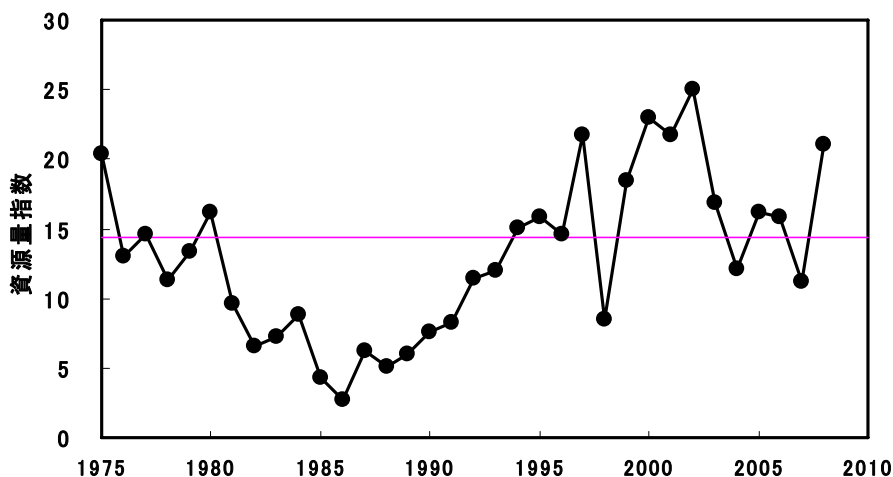


図 2 スルメイカの資源量指数の変化
細線は近年平均（14.43 個体）を示す。

3) 魚体の大きさ

各調査点の分布密度（CPUE）で重み付けした平均外套背長組成を図 3 に示す。2008 年は外套背長 15cm～20cm 台の分布密度は昨年および近年平均の 2 倍前後であった。しかし、外套背長 22cm 以上の分布密度は近年平均を下回り、23cm 以上では 30%以下であった。

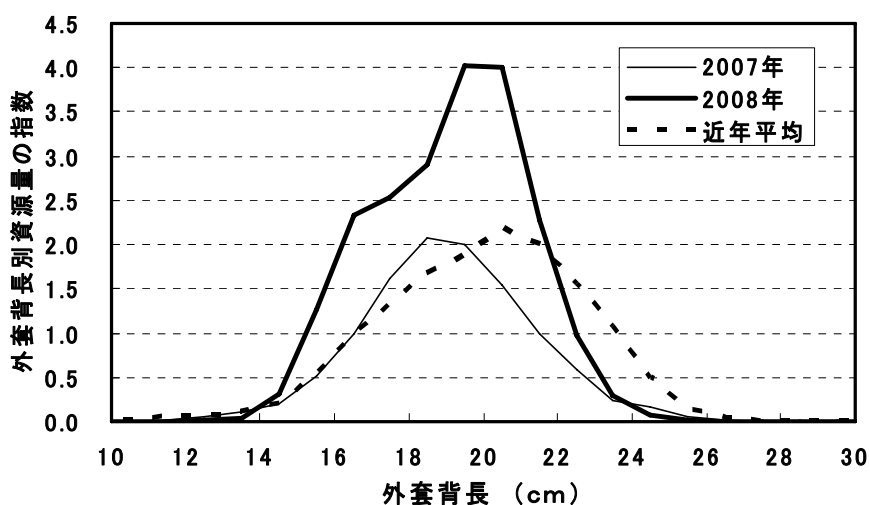
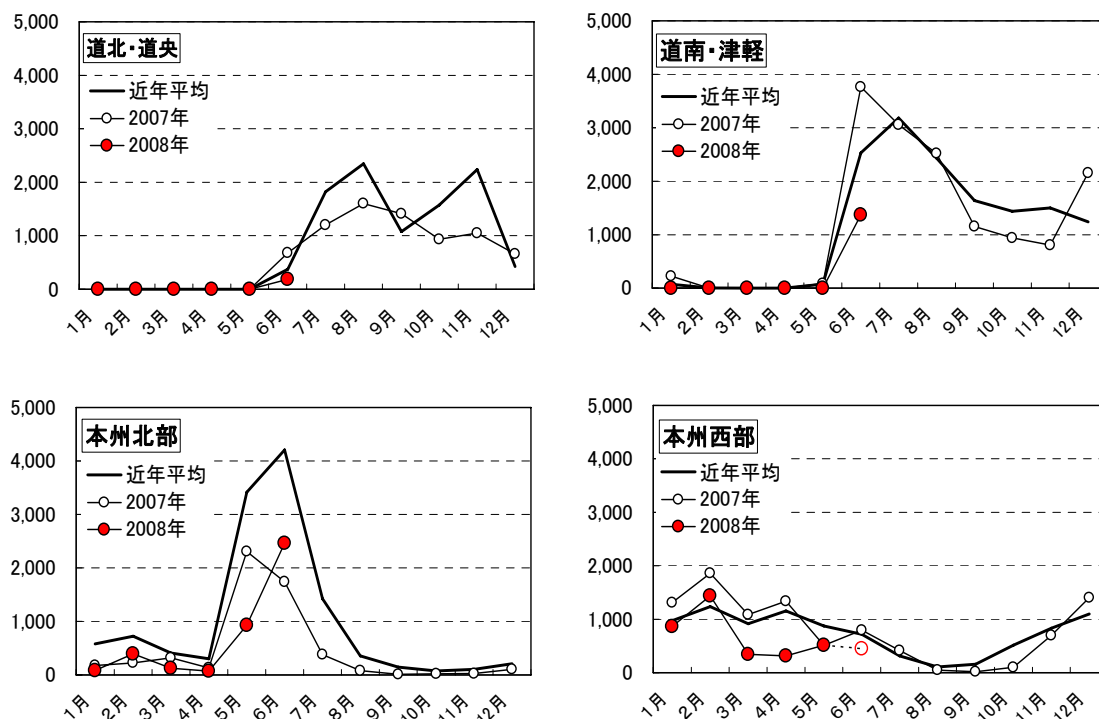


図 3 日本海漁場一斉調査結果による CPUE 重み付け平均体長組成
各外套背長階級の値は釣機 1 台 1 時間あたりの平均採集個体数を示す。

2. 2008年6月までの漁況の経過

2008年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。今年は予想以上に水温の上昇が鈍かったことに加え、小型のイカが中心であったことから、漁期開始が遅れ、5月の本州北部日本海（石川県～秋田県）では昨年および近年平均の半分以下であった。その後、6月には本州北部日本海の漁獲量が増加し、昨年を上回ったものの、道南・津軽では昨年および近年平均の半分程度の水準のままであった。なお、漁獲量の低迷には、魚体が小型であったことによる魚価安に加え、最近の燃油高騰の影響も大きいと判断される。



* 本州西部の6月の漁獲量は一部未集計

図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量（トン）
各道府県試験研究機関資料より作成（本州西部は一部未集計）。

3. 太平洋側（冬季発生系群）の分布状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を経由して日本海に來遊する。そのため、太平洋側の冬季発生系群の分布状況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成20年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報 (<http://abchan.job.affrc.go.jp/index.html>) では、日本海と関連の深い津軽海峡内を除き、來遊量が昨年を下回ると予想されている。

参 画 機 関

北海道立中央水産試験場	鳥取県水産試験場
青森県水産総合研究センター	島根県水産技術センター
秋田県農林水産技術センター 水産振興センター	山口県水産研究センター
山形県水産試験場	長崎県総合水産試験場
新潟県水産海洋研究所	社団法人 漁業情報サービスセンター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
石川県水産総合センター	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所 東北区水産研究所 日本海区水産研究所
福井県水産試験場	
京都府立海洋センター	
兵庫県立農林水産技術センター 但馬水産技術センター	